

教育開発推進機構 NEWSLETTER

教育開発ニュース

VOL. 10
NEWSLETTER

KOKUGAKUIN University 平成26年(2014)8月31日

目次

● 巻頭特集

教育開発推進機構 ランゲージ・ラーニング・センター発足

・センター長挨拶「地域性と国際性の調和」を目指してーグローバル化と國學院大學

ランゲージ・ラーニング・センター(LLC)長 大久保桂子(文学部教授)…………… 2p

・国際交流を世界と繋がるきっかけにー國學院大學の国際交流ー国際交流事務局国際交流課 …… 3p

● 國學院らしい教養をもとめてー教養総合科目の改編と「國學院科目」教養総合演習…………… 9p

● シリーズ「大学授業最前線ー教員の努力！学生のまなざし！(10)ー」…………… 14p

担当教員間の協力に基づく初年次教育(文学部日本文学科)

初年次教育科目担当者会議 井上明芳(文学部准教授)

「日本文学概説Ⅰ」担当 谷口雅博(文学部准教授)

「日本語学概説Ⅰ」担当 諸星美智直(文学部教授)

「伝承文学概説Ⅰ」担当 飯倉義之(文学部助教)

● 教育開発推進機構彙報(平成26年1月1日～7月31日)…………… 19p

● 新任職員紹介…………… 20p

● そったくどうし 啐啄同時ー編集後記…………… 20p

教育開発推進機構

ランゲージ・ラーニング・センター(LLC)長



「地域性と国際性の調和」を目指して

ーグローバル化と國學院大學ー

●ランゲージ・ラーニング・センター(LLC)長

大久保 桂子 (文学部教授)

平成26年4月、教育開発推進機構の新しい学修支援組織として、ランゲージ・ラーニング・センター(通称LLC)が発足した。LLC設置の主旨は、外国語の自主学修機会を提供することによって、学生の外国語力の向上をはかることである。本格的な施設が竣工するにはまだ時間を要するが、すでに専任教員を置き、外国語の自主学修をサポートするための手法や設備の検討を始め、e-ラーニングによる英語学修や留学前講座など、一部の業務を開始している。

多くの大学では、すでにこのような語学学修センターを設けて学生の語学力の育成に努めており、いささか遅きに失した感もある。日本に強い大学として定評のある國學院だが、外国語特に英語に対して拒否反応をおこす学生が多いことも事実で、このままでは「日本に強いが世界に弱い」大学になりかねない。いまやあらゆる大学に課せられているグローバル化への対応、グローバル人材の育成に、これ以上遅れてはならないという危機感が、LLC設置の動機であったとあってよい。

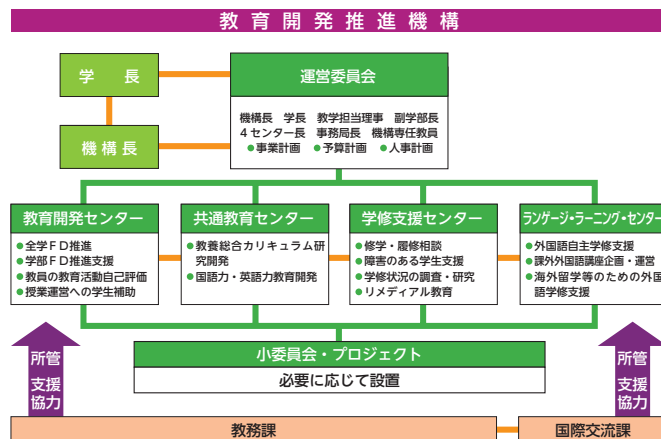
もとより、外国語能力はグローバル人材の基礎要件ではあるが、十分条件ではない。今日しきりにいわれる、グローバル人材のもう一つの基礎要件は、海外体験と異文化への感受性である。これは個々の学生の体験と学修を通じて培われることを期待するほかはないが、LLCと同時に発足した国際交流推進部が、その方策を開拓することであろうし、先の2つの基礎要件に「日本に強い國學院ブランド」を加味した「グローバル・チャレンジ・プログラム」が、平成24年から実施されている。LLCの外国語自主学修は、その一端を担うものでもあることを付け加えておきたい。

LLCでは、まず、学生たちの外国語力は社会的基準に照らしてどの程度であるか、を把握する必要があると考える。さらに、自分の外国語力を知ったうえで、それを伸ばしたいと考えている学生がどれほどいるのか、をつかみたい。外国語の自主学修の有効性は、ひとえに学生本人のモチベーションに懸かっているからである。次に、TOEIC、TOEFL、HSK等の世界基準の外国語能力試験の受験機会を増やし、その得点向上に結びつくような自主学修のツールを導入する。おそらくその大部分は、ITを利用した先端的手法による自主学修になるであろう。

学生たちに、苦手だと思っていた外国語がわかるようになった、と実感してもらいたい。外国語がわかると、自分の知の世界、生きる世界がひろがることを感じてもらいたい。それがグローバル化した社会で生き抜くために必要な、基礎要件だからである。

効率的でカスタマイズされた語学学修方法を提供し、個々の学生の語学力を伸ばしていくこと、それを通じて、世界で生き抜く力を備えた卒業生を送り出していくこと、これがLLCに携わる者すべての願いである。

教育開発推進機構組織構成図



国際交流を世界と繋がるきっかけに

—國學院大學の国際交流—

国際交流事務部国際交流課

國學院大學ではこれまで、自国の文化に誇りを持ちつつ、異文化を尊重し、共生できる人材を育成するため、これまで国際交流課を中心に留学プログラムをはじめとする、多様な国際交流事業を展開してきました。さらに本年度からはグローバル化社会に対応した人材育成を強化するため、新たに学内に国際交流部を発足させ、LLCと一体となり国際交流事業をより強力に推進してゆくこととなりました。このコーナーでは、本学における国際交流事業と、日本人学生、そして留学生に対するサポート体制について紹介します。

大学は学生にとって世界への入口である必要があります。いくつか準備されている入口のひとつが国際交流の様々なプログラムです。

本学の学生にとっての国際交流には大きく分けて下記の2つがあります。

留学プログラム

現在、本学の留学プログラムとして下記が準備されています。

●短期留学

夏期、春期の長期休暇を利用して、約1カ月間英語、中国語の学修を目的に留学するプログラムです。語学力の向上に加え、文化体験が主な目的です。教育開発推進機構のランゲージ・ラーニング・センター（LLC）はこの留学の事前語学研修を運営しています。各年度100名前後の学生が短期留学とその事前語学研修に参加しています。

●セメスター留学

本格的に英語力、中国語力を向上させることを目的とした1学期間（4カ月）の留学です。例えば、英語圏へのセメスター留学は「中級の英語学修者が上級になること」を目標に行われています。留学前後の研修をLLCが担当していますが、今後は留学の参加資格（例TOEIC[®]スコアで550点）に到達するための学修でもLLCとの連携を深めていきたいと考えます。各年度30名前後の学生がセメスター留学に参加しています。

●協定留学

本学の協定校へ交換留学生として参加する留学です。例えば英語圏の場合、カナダ、アメリカの大学に留学し、現地の学生と同じ授業を履修します。各年度数名が協定留学に参加しています。

キャンパスでの国際交流

本学には、学部・大学院の留学生、協定校からの交換留学生など現在およそ130名の留学生が在籍、在学しています。日々の授業の中で留学生と共に学んでいる皆さんもいるでしょう。

授業外でも様々な形で交流の機会があり、既に積極的に参加している学生もいます。今回は、その中から「K-STEPアシスタント」と「カンパセーションルーム」に焦点をあて、その活動の概要と参加学生の体験談を紹介します。

留学生サポートのボランティア ～K-STEPアシスタント～

皆さんが異国へ留学し、暮らしたならば様々な問題にぶつかることでしょう。外国語を学ぶにしても、自分の専門領域を外国語で学修するにしても、授業についていくのは日本で学んでいる時以上に困難になります。外国人として、しかも学生として滞在し生活するためには、自分が生まれ育った国で生活するのとは違った煩雑さが常に伴います。異国の地で家族とも古い友人とも離れて暮らし、学ぶ中で孤独感と戦うことも多いでしょう。本学には、自分ができる範囲で留学生を助ける役を引き受けてくれるグループがあります。それがK-STEPアシスタントです。

本学では様々な留学生が学んでいます。その中で「日本語学修」と「英語による日本文化・社会の学修」に焦点をあてた交換留学生特別プログラム（K-STEP）に参加する交換留学生をK-STEP交換留学生と呼んでいます。K-STEPアシスタントのサポート対象は当初はこの限られた留学生グループであり、K-STEPアシスタントの名称の由来もここに 있습니다。平成16年から始まったK-STEPアシスタントは、その後日本人学生の数も増

え、またサポートの対象も拡大していきました。現在では、約250名の学生がK-STEPアシスタントに登録しています。また、サポートの対象も全ての交換留学生に広がっていますし、案件によっては学部や大学院の留学生もその輪の中に参加しています。

K-STEPアシスタントに参加している学生の目的は様々ですが、次のようなことを求めて、この活動に参加し続けています。

1. 留学生とのネットワーク拡大

同じキャンパスで留学生が学んでいるのは知っているが、どのように接点を持てばよいか分からない場合、留学生へのサポート、様々な交流活動を通じて留学生との距離を縮めることができます。学期の始まりと終わりに開催される国際交流歓迎会、送別会には多くのK-STEPアシスタントが参加しています。また、アシスタントの活動を通じて、同じように国際交流に興味を持つ日本人学生とも知り合うことができます。

2. 異文化、日本文化の学修

留学生が日本文化を学ぶ訪問授業、イベントにはK-STEPアシスタントも参加することがあります。例えば、歌舞伎鑑賞教室に参加する際、浮世絵美術館を訪問する際、日本民家園を訪問する際、人数は限られますがアシスタントの日本人学生も参加します。歌舞伎も浮世絵も民家も接したことのない日本人学生も多くいます。多くのアシスタントが留学生と同様に、訪問イベントを自分の知らなかった日本文化を学ぶ機会としています。訪問先では「日本代表」として様々な質問を留学生



料理文化交流会

から受けるでしょう。自分が何を知っておくべきかを確認する良い機会となるはずです。また、留学生の出身地の芸術・文化を知るチャンスにもなるかもしれません。

3. 留学生サポート

そして、純粋に留学生をサポートしたいという気持ちからK-STEPアシスタントに参加してくれる学生もいます。ほとんどの学生が「自分が留学した際に現地の学生にサポートしてもらったから」という理由で活動に参加してくれます。自発的に他者をサポートする気持ちでいられることは大きな財産です。

K-STEPアシスタントへの登録を希望する学生は国際交流課のWebページから登録を行う仕組みになっています（「大学ホームページ」→「国際交流・留学」→「(キャンパスでできる国際交流) K-STEPアシスタント」）。

サポートの機会、国際交流イベント、日本語パートナーの募集があるたびに、国際交流課からK-STEPアシスタントへお知らせのメールが送られます。K-STEPアシスタントは自分の都合、スキル、興味に合わせてそのメールに返信をし、自分が参加する活動を決めていきます。



経済学科3年
菊地 直哉さん

経済学科3年の菊地直哉と申します。以前よりK-STEPアシスタントに登録をしていましたが、本格的に活動を始めたのは昨年秋から、つまり、9月に新しい交換留学生10名程が来日してからです。私がK-STEPアシスタントとして行ったことは、留学

生の日本での生活サポート、日本語学修のサポート、そして気軽な話し相手の3種類に分類できると思います。

●日本での生活サポート

留学生への生活サポートは主に来日直後に必要になります。例えば、銀行口座を開設する手伝いをしました。来日直後の外国人が口座を開設できる銀行は非常に限られていることを私は知りませんでした。台湾ではFirst NameとLast Nameが英語のものとは逆になっており、書類を作るのに混乱したのを覚えています。携帯電話やwifi機器の契約は更に大変でした。1年間だけ日本で暮らす外国人の身になって、様々な仕組みを考えると、彼らの苦勞がよくわかります。



イバンさんと日本語の練習

●日本語サポート

私はスペインのイバンさんの日本語パートナーも務めています。自分は日本語教師ではないので、ネイティブスピーカーとして根気強く誤りを指摘し続けることしかできません。定期的に、時間を決め、イバンさんが話す日本語と書く日本語と一緒に練習しています。それ以外に、昼休み等にグローバルラウンジでイバンさんに会う際にも、もし間違いに気づけば指摘してあげます。

●気軽な話し相手

留学生と過ごす大部分の時間は、自分はK-STEPアシスタントとしてではなく、気軽な話し相手として接しています。留学生の何人かには友人の一人として数えてもらっているでしょう。しかし、彼らに知り合ってからすぐに距離が縮まったわけではありませんでした。歓迎会に参加したり、江戸東京博物館訪問に同行したりしながら、気軽な話し相手となっていきました。

私は日本や東京を知るために様々な国際交流イベントに参加しました。これらは留学生のために計画されたものですが、私にとっても学ぶことが多いものでした。例えば、昨年11月には酉の市を訪れたのですが、



酉の市訪問

K-STEPアシスタントとなる前はこのような季節感あふれる催しが東京にあることに全く気がませんでした。

K-STEPアシスタントには現在250名を越える学生が登録していると聞いています。皆の参加の仕方は様々です。ほとんど全てのイベントや留学生を助ける機会に参加する学生もいれば、1年に1回だけ国際交流歓迎会にやってくる学生もいます。参加の仕方は、各学生の都合や興味によるもので私は構わないと思います。しかし、K-STEPアシスタントの中でも密に参加する学生でコアグループを作りたいとも考えています。知っていることを共有したり、一緒に研修をするためです。私はK-STEPアシスタントはあくまでも無給のボランティアが良いと思っています。謝礼が欲しいのではなく、単純に留学生や他のアシスタントとの活動が楽しいので私は参加しているのです。ただ、交通費や博物館の入場料の負担が完全になくなってくれればありがたいです。

これからも、私はK-STEPアシスタントに深く関わっていきたいと思います。そして、卒業後はK-STEPアシスタントとしての経験を活かせるような仕事に就きたいと考えています。



国際交流歓迎会

今後の課題

K-STEPアシスタントには現在250名を越える学生の登録があり、学内の学生ボランティア組織の中でも最大の規模になっています。しかし、登録者のK-STEPアシスタントとしての参加度には大きなばらつきがあります。今後は、「本気で留学生をサポートしたい」中心メンバーと「国際交流の機会を得たい」交流希望のメンバーに分けていく必要があるでしょう。そして、中心メンバーには、研修機会等も提供し、更に留学生サポートに加わってもらう必要があるでしょう。

カンパセーションルームへ ようこそ

Welcome to English Room!

欢迎来到中国角

한글방에 오신 것을 환영합니다

国際交流センターでは、学期中の水曜日の11時から昼休み終了まで、不定期で「カンパセーションルーム」が開かれます。ここでは、学生が集まり、リラックスしながら談笑したり、昼食をとったりしています。ただ一つ、他のラウンジと違うのは、外国語を話さなければならないということです。そうです、いつもの昼休みを、違う言葉で楽しむのが「カンパセーションルーム」です。

現在、開かれているのはEnglish Room(英語ルーム)、漢語角(中国語ルーム)、한글방(韓国語ルーム)の3つの部屋です。カンパセーションルーム開催日には交換留学生が集まり、各ルームのリーダーを務めます。

6月11日のカンパセーションルームでの光景を紹介してみましょう。

11時に8名の交換留学生が国際センターのグローバルラウンジに集合しました。最大で25名程収容可能なこの部屋は、この日は英語ルームに使われました。交換留学生は部屋内に3つの島を作り、利用者を待ちます。普段は日本語をできるだけ使おうとする留学生もこの日はばかりは遠慮なく英語でコミュニケーションを展開します。やがて、日本人の学生がやってきます。12時までは比較的空いています。早めの昼食を取りながら、授業のこと、新しいアプリのこと、友達のことなど他愛無い



英語ルーム

話が続きます。12時が近づくと部屋を訪れる日本人学生の数も増えていき、椅子もどんどん埋まっていきます。

この日は3つのグループに分かれ、話をしていききました。そこで役に立つのが「質問カード」です。「人生最後の日に何を食べたいですか?」「不死身になれる薬を手に入れました。あなたはこれを飲みますか?」など、誰でも答えを持っている、しかし、今まで考えたことがないような話題が続きます。最近の流行は「Drawing Competition(イラストゲーム)」です。お題にあわせて、それぞれがイラストを描き、その後イラストの意図を発表しながら、皆で品評をするというものです。例えば、「雨の日」のテーマでイラストを描き、「最もおしゃれなイラスト」という基準で優勝者を決めていきます。

レベルの差はありますが、どの学生もある程度英語はわかります。ゲームや日常の話題を使って、自分の言いたいことをわずかでも英語で口から発することができれば英語ルームに来た甲斐があります。教室の中の練習も、テキストを使っての学修も英語の上達には必須です。それと合わせて、自ら英語を発語する機会も必要です。英語ルームを自然な発語機会として役立ててくれる学生が増えることを目指します。



外国語文化学科1年
霜田 優美さん

英語ルームに来るのは今日が2回目でした。前は友達と二人で来たのでそうでもなかったのですが、今日は一人だったので入る際に少し緊張しました。

実際は、部屋に入るとすぐに空いている椅子に座るよう案内してもらって、グループに入れてもらったので、杞憂でした。グループではクイズとイラストゲームを行いました。イラストゲームでは一度優勝もしました。よくわからない時にはリーダーの留学生がいろんな方法で説明してくれたので、参加は難しくはなかったです。昼食をとりながら参加している方もいましたが、私は本当に集中しないと話に入っていけないので、昼食を



英語ルーム

済ませて来て正解でした。

例えば、毎週のように、もっと頻繁にこのような機会があると良いとも感じています。

国際交流センターの2階で開かれた中国語ルームと韓国語ルームは、英語ルームに比べると訪れる日本人学生数が少なくなります。また、中国語や韓国語を習い始めたばかりの学生も多いので、「日本語禁止」のルールも徹底しすぎないようにされています。

例えば、6月11日の韓国語ルームでは留学生が3名と日本人学生が4名参加していました。皆で韓国のなぞなぞに挑戦してみました。なぞなぞは言葉の音を題材にしたものがほとんどで、韓国では子供が楽しむような問題でも、日本人の学生には新鮮で難しい場合があります。

今後の課題

現在、カンパセションルームは交換留学生の授業、訪問イベントの無い水曜日にのみ実施しています。したがって、不定期での開催に留まっています。今後、この仕組みを学生にもっと役立ててもらうには、頻度を増やし、定期的開催する必要があります。そのためには、現在交換留学生が務めている運営リーダーの役割を毎週参加できるようなネイティブスピーカーが担当する必要もあるでしょう。また、「外国語ルーム」という日本語禁止の空間を常設にする方法も考えられます。

各ルームで行う活動も含め、カンパセションルームが真の意味で学生の外国語学修に寄与できるまでには改善の余地がまだ多くあります。今後その運営方法の確立と有効性の実証は教育開発推進機構ランゲージ・ラーニング・センターの課題の一つとなっていくことでしょう。



日本文学科3年
田中 秋帆さん

韓国の音楽に興味を持ったのをきっかけに韓国語は高校生の時にも勉強していました。國學院大学でも韓国語の授業を取っています。この韓国語ルームに参加するのは初めてです。

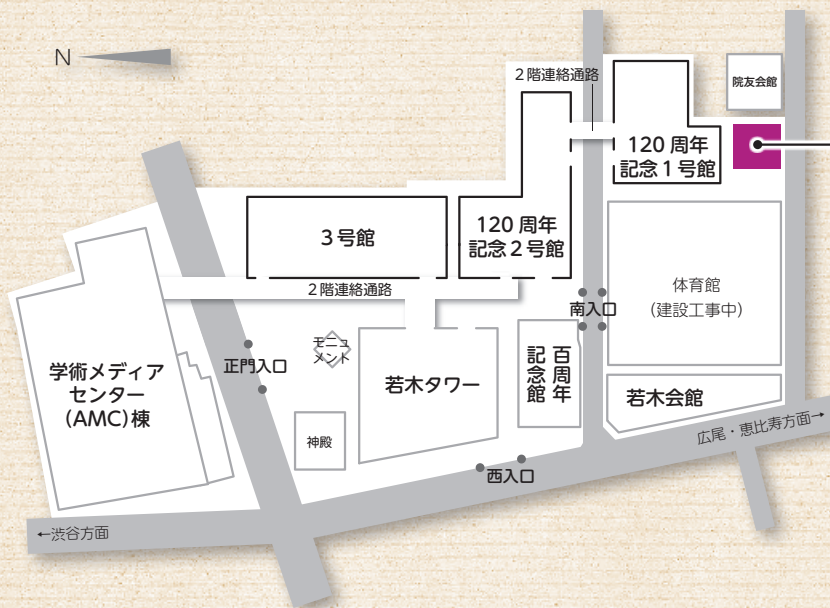
韓国語を勉強している学生はもっとたくさんいるので、多くの学生に利用してもらいたいです。国際交流センターが見つかりやすい場所にあればよいのとも思います。

今後もカンパセションルームは水曜日に開催予定です。興味のある学生の皆さん是非この機会を利用してください。

今後もカンパセションルームは水曜日に開催予定です。興味のある学生の皆さん是非この機会を利用してください。



コリアンルーム



国際交流センター

国際交流センターは渋谷キャンパス南端に位置する建物で、本学の国際交流の現時点での拠点となっています。この建物の開館時間は授業日の9:00から17:00です。詳細はWebページ等で確認してください。

国際交流センター施設紹介

交換留学生特別プログラムの授業や、留学前研修を行う演習室の他に次のような施設があります。

●グローバルラウンジ（1階）

25名程度で満員となる小さなラウンジです。ここでは日々留学生と留学生との交流に興味を持つ日本人学生が集まり、昼食を取ったり、読書をしたり、談笑したりしています。



韓国出身で法律学科3年の李俊權です。授業が空いてしまった時や昼休みによくグローバルラウンジを利用します。ここでは、留学生、日本人学生を問わず友人と話をします。時には文化の違いで話が膨らむこともあります。

●語学学修用PCルーム（2階）

この部屋が他のPCルームと異なるのは「声をだしてもよい」点です。Web上の教材やCD-ROM教材を使って声を出しながらの外国語の練習が可能です。貸し出し用のヘッドフォン（マイクつき）とSkype利用のためのカメラも準備されています。



外国語文化学科2年の入江名月です。9月から始まる、米国ミズーリ大学での Semester 留学の事前学修でこの部屋をよく利用します。Skypeでフィリピンの英語の先生と1対1でスピーキングの練習をしています。

●国際交流課事務室（1階）

留学やキャンパスでの国際交流の様々な手続き窓口を担当するのが国際交流課です。事務室は国際交流センター1階にありますのでお立ち寄りください。

また、「留学の相談」も随時受け付けていますので、希望者は国際交流課Webページから申し込んでください。
 「大学ホームページ」→「国際交流・留学」→「(キャンパスでできる国際交流) 国際交流センターのご案内」



國學院らしい教養をもとめて



— 教養総合科目の改編と「國學院科目」「教養総合演習」 —

國學院大學では、全学共通の教養科目「教養総合科目」を改編し、平成26年度から新しいカリキュラム編成のもとで授業を運営しはじめました。今回の改編では、新たに本学教養教育の編成・実施方針を明確化したうえで、グローバル化する社会に対応しつつ、本学の建学の精神に基づいた教養教育の展開が目指されています。また、日本の文化的伝統や現代の問題について、体験やフィールドスタディーを交えながら考えて行く「國學院科目」や、学生自らが学びの主人公として主体的に学び、批判的思考力、ディスカッションやプレゼンテーション能力など、大学での学びはもとより、社会生活で必須となるスキルを磨く「教養総合演習」という新たな科目群が新設されたのも大きな特色のひとつといえましょう。学生の皆さんに、新しい、本学ならではの教養教育を楽しんでいただければと思います。



教育開発推進機構
共通教育センター長
柴崎 和夫

改訂された教養総合カリキュラム

教養総合カリキュラムは、國學院大學の学士課程教育プログラムのなかで、各学部が責任を持つ専門教育と並ぶ2本の柱の1本です。基本的に全学部の学生に共通して提供されるカリキュラムと言うことで、共通教育カリキュラムとも称しています。

さて、現行の教養総合カリキュラムは、平成7年(1995年)にそれ以前の一般教育(一般教養)の全面的な見直しが行われ、その結果成立したカリキュラムが原型です。平成21年(2009年)には、「グローバル化の進展による均質化と、文化の多様性・複雑性が併存する世界で生きるため」として、「人間総合科目群」という新たな枠組みを設定し、テーマ別講義科目の再編を軸とした見直しを行いました。見直しから4年を経て、近年は高度の専門性が求められる『知識基盤社会』の中で活躍する人材の育成や、グローバル化に対応する人材の育成を、大学が社会から強く求められるようになって来ました。

グローバル化に対応する人材育成というと、すぐに外国語(特に英語)教育の強化が筆頭にあげられますが、他方で自分の生活基盤となっている地域・国に対する自覚の確立を求める大切さも強調されています。これは、日本語や日本文化に対するしっかりした知識・理解を身につけることが、ますます重要であることを意味しています。

もう一つ重要な観点は、日本社会の少子化の進行で18歳人口の著しい減少が引き起こす、大学間競争の激化です。大学には、大学教育の「質保証」が求められると同時に、建学の精神を反映した「個性ある教育」の遂行も要請されています。教育の「質保証」でいえば、いわゆる3ポリシー(「学位授与方針(ディプロマ・ポリシー)」、「カリキュラム編成方針(カリキュラム・ポリシー)」、「入学者受け入れ方針(アドミッション・ポリシー)」)の制定と、それらに基づいた教育および「内部質保証」体制の構築は当たり前のことと考えられています。國學院大學でも各学部・学科で3ポリシーを制定しました。しかしながら、主体が各学部・学科であるということは、専門教育に関してのポリシーだということです。

これに対し、教養総合カリキュラムは全学共通(学部横断的)に提供されるものであり、『ディプロマポリシー』を定めることが難しい、というよりも、学位を授与しているわけでないので基本的に決定できないと言うことです。しかしながら、國學院大學として学生に提供する教養総合カリキュラムであるから、『國學院大學らしさ』を持ったカリキュラムとして、その意図を明確にしておく必要があると考えました。つまりは、教養総合カリキュ

ラムが目指す人材育成の目的・目標をあきらかにし、いわゆる「カリキュラム・ポリシー」に相当する方針をしっかりと定めることが大事だと考えました。

以上のことが、今回の教養総合カリキュラム見直しの経緯であり、目的でもあります。「國學院らしさ」とは何かにこだわり、「建学の精神」を改めて考え直してみました。その詳細は以下で示します。ただ、今回の改訂のなかで是非とも実現したかったことを一つ述べておきます。それは、個人的な思い入れが強いことは承知ですが、「体験する」ことを重要なキーワードとして取り入れる事でした。少し大げさですが「知行合一」が大切であることを言いたかったのです。「知行合一」のそもそもの意味とは少しずれますが、頭でっかちで知識のみ仕入れるのではなく、自ら実践もすることで学ぶ、ということ、教養総合カリキュラムで保証したいとの思いがありました。

今回の教養総合カリキュラムの改訂が本当にその目的を達成できるかは、実際の様々な科目を担当する教員の力量、あるいは教養総合カリキュラムの中での自分の科目の立ち位置をしっかりと理解して授業を実施しているかどうか、などに大きく関わります。そしてそれは、どれだけ今回の教養総合カリキュラム改訂の意図を正確に伝え、理解してもらい、実践してもらえるかにも関わっている、と考えています。

今回のこのレターの記事が、多くの教職員に読まれ、理解してもらえることを期待しています。

本学教養総合科目の「カリキュラムポリシー」に準じた人材育成上の目的

—建学の精神をふまえて個性ある教育を展開することをめざす—

学則より

第1条 本学は神道精神*に基づき人格を陶冶し、諸学の理論並びに応用を攻究教授し、有用な人材を育成することを目的とする。

*主体性を保持した寛容性と謙虚さの精神

有栖川宮熈仁親王による告諭、ならびに上記の学則第一条に述べられていることに基づく國學院大學の人材育成の目的を現代に即して捉えなおせば、日本人としての主体性を保持しつつ多様性を認めて謙虚に学ぶこと、人

間性を高めて人生の本分を尽くすこと、諸学の基を極めつつ基礎的な理論と応用力を身につけることをめざしているといえます。

このような人材育成の目的に対し、これからの教養総合カリキュラムが果たすべき役割は、1) 神道精神についての学び、2) 人格を陶冶するための学び、3) 学問の基を究めるための学び、4) 諸学と諸外国の良い点の学び、を提供することにあります。これによって、地域や社会の多様性、人生や価値観の多様性、学問や思想の多様性を認知するとともに、自らの拠って立つ基盤である日本の歴史、伝統、文化を相対的に理解して自分自身を肯定的に認め、未来社会の変動に対しても、時代に流されることなく、自己の本分を尽くして生きてゆくための力を身につけることを目的とします。

目的を実現するための科目構成及び到達目標

上記の人材育成上の目的を実現するために、教養総合カリキュラムの構成を表1「教養総合カリキュラムの構成」のとおりとし、教養総合カリキュラム全体の到達目標として、以下の6項目を設定します。

- ①日本の伝統と文化(歴史を含む)を理解し、説明できる。
- ②文化の基盤としての国語(日本語)を知り、操ることができる
- ③一言語以上の外国語を習得し、言語を含む外国文化を理解することができる。
- ④多角的、複眼的な視点で物事を捉え、考えることができる。
- ⑤自ら疑問を発し、調査・研究する意欲や態度をもつ。
- ⑥多様性を認め、他者を理解することができる。

これらの目標と教養総合カリキュラムを構成する授業科目との関連については、基礎科目群のうち「神道科目」、「國學院科目」は主に①に関連し、「言語科目」は②と③の目標達成を目指す科目群です。人間総合科目群は主に、④、⑤、⑥の目標達成を目指す科目群と位置づけることができます。上で示した「カリキュラムポリシーに準じた人材育成上の目的」で述べた教養総合の役割の観点からは主に、1)に関連するのが①と②、2)は①から⑥すべてに通じ、3)に関しては④と⑤、4)に関しては

③から⑥の目標となります。

表1「教養総合カリキュラムの構成及び到達目標」

教養総合カリキュラムの構成		関連する到達目標	
教養総合科目	基礎科目群	神道科目	①
		國學院科目	①
		日本語科目	②
		必修・選択必修外国語科目	③
		スポーツ・身体文化科目	① ⑤
	人間総合科目群	テーマ別講義科目	④ ⑥
		総合講座科目	④
		教養総合演習科目	⑤
		情報処理科目	-
		キャリア形成支援科目	④ ⑥
		選択外国語科目	③
		Japan Studies	-
		留学生科目	-
		単位認定科目	-

國學院らしい教養と学びのスタイルを学生たちに!

—「國學院科目」「教養総合演習」の新設—

今回の教養総合科目の改定では、先に示した教養総合科目の「カリキュラムポリシーに準じた人材育成上の目的」の制定のほかに、テーマ別講義や外国語科目など、既存の科目群の再編成が行われました。しかし、今回の改定の目玉といえるのが、本学ならではの教養教育を行うことを目的とする「國學院科目」と、アクティブラーニング(能動的学習)によって学生が自発的、主体的に学修することができる授業群「教養総合演習」の新設です。

日本文化を考え、発信できる力を養う!—「國學院科目」

グローバル化が進む現在、多くの日本の大学では、「グローバル人材」の育成を目指して英語力の強化や海外留学の促進を図っています。もちろん本学においてもランゲージ・ラーニング・センター(LLC)を新たに設置するなど、学生の外国語能力のさらなる向上を図るため、様々な努力が行われています。しかし、グローバル化への対応とは、単に外国語に堪能で、海外で働く能力を持つ人材を育てればよいのでしょうか? 國學院大学では、

こうした時代だからこそ、本学が創立以来育んできた日本文化に関する教育を、より一層進めてゆきたいと考えています。なぜならば、グローバル化が進む時代だからこそ、その波に押し流されず、日本人としての主体性を保持して世界で活躍できる人材を育てなければならないと考えるからです。そして、自文化への理解と誇りを持つ人こそが、他の国や地域の文化に対する尊重と寛容の念を持つことができるはずです。日本文化を学ぶことを通じて、真にグローバル化社会の中で活躍できる人材を育てたい、そうした思いから、本学では平成26年度か

ら日本文化を学ぶ科目群「國學院科目」を開設しました。

「國學院科目」とは、本学のミッションである「伝統と創造の調和」「個性と共生の調和」「地域性と国際性の調和」に基づいた、特色ある教養教育を推進するために設けられた科目群です。具体的には、日本の伝統文化や自然、さらには日本社会が直面している様々な課題を学ぶことを通じて、本学の建学の精神である「本ヲ立ル」即ち、日本とは何か、日本文化とは何か？を考え、自らと社会に問いかけてゆける人物を育てようとするものです。また、この科目群では、講義だけではなく、「雅楽」

や「書道」、「礼法」や「茶道」など、実技・実習やフィールドスタディーを交えた授業も多数設けられるのも特色のひとつです。つまり、日本の伝統文化を単に知識としてだけではなく、実際に「体験」を交えながら知ることが求められています。もちろん、これは単に体験そのものを重視するものではありません。むしろ、



小野先生 月曜6限 雅楽入門



橋本先生 火曜6限 書道入門

國學院科目、26年度・27年度開講予定 (27年度開講科目の名称は変更することがあります)

國學院科目	26年度開講科目	27年度開講予定科目
日本の基層文化…神道を中核とする日本の伝統文化や精神、そして歴史への理解を深めることを目的としています。	「現代日本社会の「神道」 「女性祭祀の伝統」 「祭りに潜む世界を探る」 「民俗宗教論」 「神道と日本人の信仰」 「日本の伝統文化と現代社会」	「日本の霊山と精神文化」
國學院の学問…國學院大學が培ってきた学問的な伝統や、現在大学で行われている学際的な研究の成果を直接学生が学ぶことができる授業が開かれています。	—	「國學院大學の歴史と未来」 「渋谷学」 「共存学」 「フィールドスタディ」
和の心・技・体…日本の文化的伝統について深く理解するとともに、そこにみられる精神と、代表的な伝統文化・芸能を、体験を織り交ぜて学ぶことを目的としています。	「雅楽入門」	「茶道入門」 「将棋と日本文化」 「礼法」
ことのはの文化…本学は132年間にわたり歌人や作家、そして高い国語能力を持つ教員を社会に輩出してきました。その伝統を継承し、古典を基礎とした国語能力をみがき、ことばや書をつうじて豊かに表現することができるようになる授業が設けられています。	「書道入門」	「和歌をまなぶ」 「和歌を詠む」

※他に歌舞伎や能などの伝統芸能や相撲、有職故実などの授業の開設も検討されています。

講義と体験を織り交ぜることにより、日本文化に対する、学生の主体的な学習意欲を一層引き出すことを目的としています。

まだまだ始まったばかりの「國學院科目」ですが、今後平成28年度までに随時科目内容を充実させ、本学ならではの教養プログラムとして成長させてゆきたいと考えています。

自ら課題を見つけ、探求し、表現する学生を育てる—「教養総合演習」スタート！

「大学の授業」というと、大きな教室で教員が講義を行っている光景を思い浮かべる方も多いでしょう。しかし、こうした講義型授業では、学生はともすれば単に授業を聞くだけの「受動的な学修」に終始してしまうことがあります。一方、高等教育界においては、授業の効果を引き出し、知識を定着させるためには、学生が自ら調べ、考え、それをグループディスカッションや発表などで表現してゆくほうが、より高い学習効果が得られるとされてきました。

近年、日本の大学では、こうした「受動的な学修」から「能動的な学修」へ、学修の質の転換が図られています。学生に自ら学び、思考し、課題を発見し、問題を解決してゆく能力を身につけさせることにより、より学修の質を向上させるとともに、社会人としての基礎力を鍛え、世に送り出してゆくことが目指されています。そのため、こうした能力を鍛えあげる授業、即ち「アクティブラーニング」(能動的学修) 授業が注目され、広く各大学で行われるようになってきています。アクティブラーニング授業の多くは、主に各学部における専門課程で展開されるのが一般的ですが、本学では、専門科目のみならず、

26年度開講科目

「口頭による自己表現の技術」	(後期)
「政治のみかた」	(後期)
「中・東欧の歴史と社会」	(前期)
「学び合うスポーツと武道」	(前期・後期)
「学生主体型授業の冒険」	(後期)

※27年度にはクリティカル・シンキングやコミュニケーションスキルを鍛える授業、さらには学生が自ら課題を発見し、探求したりグループで問題解決に当たる授業を数科目新設することを予定しています。

ならず、教養教育においてもこれを展開することを目指し、26年度からアクティブラーニング主体の授業群「教養総合演習」を開講することとしました。

教養総合演習の目的は、第一に、学生に主体的・能動的な学修を通じて学ぶ楽しみを知ってもらうとともに、課題探求力、考え抜く力、プレゼンテーション能力やコミュニケーションスキルを伸ばさせることにあります。そのため、各授業は原則的にアクティブラーニング型の授業として運営されます。そして、第二の目的として、専門教育と連携した教養教育の構築を目指します。現在本学では全学部で初年次教育を実施し、その中で課題について調べ、発表する作業を課しています。そうした初年次教育で習得した学修スキルに磨きをかける機会として教養総合演習の各授業を履修することで、2年次後半以降に始まる各学部のゼミ教育に結び付けることが可能になります。つまり、教養教育と専門教育を密接に連動させることを通じて、主体的に学び、考え、それを表現できる学生を育成することが目指されているのです。加えて、こうした能力は、大学での学びの基礎となるとともに、

教職就職活動や、さらには社会で活躍する基礎能力ともなるものです。現在はまだ開講数は少ないものの、漸次講義数を充実させてゆこうと考えています。もっとも学生らしい学びを楽しめ、かつ、社会で必要なスキルを身につけることができる「教養総合演習」、是非とも受講し、アクティブな学びを存分に満喫してください。



藤嶋先生 木曜3限 教養総合演習
(中・東欧の歴史と社会)



阿部先生 火曜2限 教養総合演習
(学び合うスポーツと武道)

大学授業最前線

— 教員の努力！ 学生のまなざし！（10） —



文学部日本文学科は、初年次教育科目担当者会議を定期的に行い、1年生の学修進度、学生生活を相談する機会を設けています。そこから、学生に対してよりよい支援は何か？ 学生に初年次に何を学ばせるのかを協議し、各授業の運営に活かしています。今回は、そんな日本文学科の取り組みについて紹介します。



教員の授業努力

初年次教育科目担当者会議

井上 明芳

(文学部准教授)

1 日本文学科の初年次教育への取り組み

日本文学科では「古典作品の読める國學院生」をテーマに掲げ、國學院大學の学問伝統を継承し発展させるための学びを日々、実践しています。その入口となる日本文学概説Ⅰ、日本語学概説Ⅰ、伝

承文学概説Ⅰを、初年次教育の導入科目として位置づけ、運用しております。

初年次教育では「はじめの一步」を用いて、國學院大學の歴史や学問伝統について1年生に学んでもらいながら、現在本科で学ぶ意義を考えさせるようにしております。また、学生として学ぶ姿勢、確認の意味も込めて注意を喚起し、講義の聞き方やノートの取り方、SNSの活用など、学生一人一人が本学での学びに誇りが持てるよう、指導をしています。学びをただ単位が取ればよいといった価値に貶めないために、4年間の学びが大いなる喜びになるよう、初年次教育を重視しています。

そのためには学問の基礎的な力の養成が大切です。テキストが「読める」こと、自分の意見をまとめて、「発表できる」こと、そしてそれをしっかりとした文章で「書ける」こと、これは当たり前かもしれませんが、日本文学科の初年次教育では、その当たり前をしっかりこなしていくことを目標としています。この目標の一環として図書館ガイダンスも行っています。

2 クラス担任会議の設置の経緯と主な内容

現在日本文学科には、日本文学・文化入門のような統一的に行う初年次教育の講座はありません。そのため従来は、初年次教育の担

当者がそれぞれにアプローチをしてきたことで、若干の齟齬が生じておりました。また、学生も入試方法などが異なるため、対応が様々になっております。

そこで初年次教育を担当するクラス担任間で、クラス担任会議を設けようということになり、一昨年より一月に一回程度で開催しています。話し合われる内容は、主に次の点です。

①学生の出席状況について

2回連続して欠席した学生がいれば、報告し、その理由についても、他の学生から訊き、対応を考える。

②学生の学びについて

初年次教育での目標を中心に、学生達の反応について報告し合います。とりわけ「書ける」という点では、課題レポートや授業時に書く小レポート（600字程度）を行い、その出来具合を見ながら、問題点を考える。その際、入試方法等も参照する。

③講義中の学生の態度、教室の雰囲気について

携帯電話の使用や私語など、こうした問題はよく聞きますが、この点は厳しく対応するなど、学ぶ姿勢について問題があれば、報告し対応を考える。

以上、3点を中心に話し合い、問題を共有しています。また、入試方法や入学前教育の状況等も報告し、指導に役立てています。問題が共有されることで担当者間の意識も統一的になり、意識的に学生ひとりひとりに声を掛ける機会も増えて来ました。とりわけ欠席しがちな学生への対応は丁寧に行っています。また、日本文学、日本語学、伝承文学とそれぞれの概説の状況を聞いていることを踏まえて、担任として、学生ひとりひとりの姿勢だけではなく、クラス全体で授業に取り組む雰囲気づくりも行っています。最初は学生もなかなか反応がないのですが、徐々に担任と距離を縮め、いろいろな授業の雰囲気を話してくれるようになります。

本来は学生の自主性に任せるべきなのですが、こうして声を掛け、クラスの雰囲気をつくるのがひとりひとりの自主性の発露につながり、2年次から分かれる専攻について、自発的に選択するきっかけになってくれればと考えています。また、レポートなどの実施についても、会議での意見を参考にして行い、「書ける」意識を育てることを目指しています。

報告される問題点は、初年次前期のみで終わらぬよう、後期より始まるそれぞれの概説Ⅱの担当者に伝えられ、活用してもらっています。また、公募制自己推薦入試方法のあり方などを考えていく上で、とても有意義な参考資料になっています。

以上、現在日本文学科が行っている初年次教育について紹介させていただきました。このクラス担任会議を行うことで、不登校や学業不振の学生がやや減ってきたように感じます。もちろん、対応に苦慮することの多いのも事実ですが、まずは問題を共有することは担当する者としては意義があります。ここで得る様々な情報は、修学相談などにもつながっており、ただがんばらせるだけの対応ではどうにもならない現状への、一つの具体的な取り組みとなっています。

長い学問・研究の伝統を継承し、さらに発展させられるような学科として、次世代を担う学生の専門性を養成できるよう、初年次教育のあり方を常に意識しながら、日本文学科は取り組んでまいります。



教員の授業努力

「日本文学概説Ⅰ」担当

谷口 雅博

(文学部准教授)

日本文学概説は4年間の文学研究の導入として位置づけられます。そのため國學院大學における文学研究の歴史や伝統を踏まえつつ、文学研究の基礎的方法を習得することを目的としています。この点については、どの先生方の授業の場合も同じです。その上で、私が留意している点は、以下の通りです。まず、後にどの時代の文学を勉強する学生にも役立てるように、一通り各時代の文学作品に触れるようにしています。最初は國學院大學の文学研究の出発点として、折口信夫の文学発生論を紹介しています。その後、漢字の伝来からはじまる文字表記の歴史を確認し、文字表記の発達展開と文学作品の内容とが密接に関連する点を説明します。作品としては、上代文学、中古文学、中世文学あたりまでを、毎年一つのテーマを設けて通覧しています。浦島説話や、妻争いの歌と説話などです。例えば浦島説話の場合、奈良時代の『日本書紀』『万葉集』『丹後国風土記逸文』から始まって、中世の謡曲・御伽草子、近代では太宰治の小説などを通覧し、昔話も参考にしつつ、浦島説話の各時代の特質について考えています。それによって、説話成立の背景や各作品の内容と時代との関わりが見えてくれば良いと考えます。

次に、受講生が2年次以降、どの分野を専攻する場合にも参考とし得る内容とするために、伝承文学、日本語学、書誌学的内容を盛り込んで行くことを心がけています。私は上代文学を専攻していますが、上代文学は神話・伝説的内容が多く、後の昔話と関わるものも多いので、伝承文学専攻を希望する学生にも興味を持って貰える内容にしたいと考えています。また、上代の言葉（上代特殊仮名遣い・上代語の音韻・語源研究）等についても触れ、文字表記の展開とあわせて語学的内容も少々盛り込むようにしています。書誌学的な面については、古写本の複製本等を見せ、後に演習授業で要求される本文校訂に関する基礎知識について触れます。漢字では異体字、仮名では変体仮名を読むことを実践して、近世以前の古写本や注釈書類を読む力を身につける、そのきっかけ作りになるように意識しています。

特にこの授業で伝えたいことは、文学作品には唯一絶対のテキストが存在するわけではないということです。常に複数のテキストが存在し、そのテキストを考えるとところからスタートしなければ、内容について考えることは出来ないということです。古典作品には殆どの場合、原典が存在せず、書写によって現在に伝わっているために複数のテキストが存在します。これまで馴染んできた古典作品の冒頭部なども、古写本では異なる本文を持っているということを伝えます。古典作品はそうした複数の人の手を経、複数の人の「読む」という行為を通して様々に変質しながら現在に伝わってきたという点を理解して貰えればと思っています。なお、複数のテキストの存

在は近現代文学にも共通する問題であるという点も強調しておきたいと思います。森鷗外・宮沢賢治の作品はもとより、著者自身が複数のテキストを作り出す場合があるという観点からすれば、村上春樹の作品も例外ではありません。

文学研究に限りませんが、大学での学習で最も大事な点は、自分で問題点を設定し、自分で調べて、自分なりの（しかも客観的な）結論を導き出すことです。文学研究において提示されている見解は、殆どは仮説であり、これまで学校で教わってきた知識も、新たに調査検討を加えることで異なる見方が出てくる可能性を常に秘めています。大学で学ぶということは、そうした研究の担い手になるということだという自覚を持って貰いたいと思っています。そういうことに対する意識付けを行うことと、それを実現するための方法を少しでも身につけることが、この授業の一番の目的です。そのため、出来るだけ実践的に、調べる・考える・書くことを授業の中で行うようにしています。2年次以降、どの専攻を選ぶとしても、日本文学概説で身につけた知識・方法が役立てれば良いと思って授業を行っています。ただ、現状では内容が盛り沢山となっているので、その分、実際に文学作品を読む時間が少なくなってしまうと思います。そのあたりのバランスを考えながら今後授業を展開して行ければと思っています。

受講学生からのコメント

日本文学概説を受講して（1年生）

私が日本文学概説の講義で一番印象深かったのは、「妻争い」の文学についてです。はじめに扱った『万葉集』の歌では、山に性別があり、人間と同じように恋愛をするというのが理解できず、ついていけないと思いましたが、自然にも人格を見出し、物語を作り出す古代の日本人の感性は本当に豊かだと感じました。神話のような話だから壮大ではあるけれど、きっと当時、この『万葉集』に書かれているような「妻争い」は、もっと身近なものとして世間に流布していたかもしれないと思います。例えば近所の若者の恋に対するうわさ話のように。

『万葉集』の歌と共通する話が『大和物語』にも載っているように、このような話は時代を超えて人を惹きつける普遍性があり、その先に現代も存在しているのでしょう。古代から変わらぬ営みのなかに



人間の本質のようなものを感じ興味深いです。古代から現代までずっと人は誰かを愛しているというのは素敵なことだと思います。

「概説授業」を受講して（2年生）

私は昨年度谷口先生の講義を受講しておりました。一番印象に残っていますのは、土佐日記や方丈記の影印本を読んだ時の講義です。中学、高校時代に触れていた古典というものは全て活字化されたものでした。それ故に、どのような形でその作品が記され、現在に伝わっているのかということ意識したことが無かったように思います。谷口先生の講義で初めて影印本に触れ、その時代の人々が使用していた文字や作品の残され方というのを知り、古典文学の世界にまた一步、足を踏み入れることが出来たように思っています。一年生の時点でこのような機会をいただきまして、大変勉強になりました。

教員の授業努力

「日本語学概説Ⅰ」担当
諸星 美智直
(文学部教授)



私が担当している「日本語学概説ⅠⅡ」は、①導入科目としての性格と、②日本語学の概説科目としての性格を持っています。

まず、導入科目として最も重視しているのは、キャリアデザイン教育です。國學院大学の教員養成は明治の草創期以来、ことに1903年（院友10期）に私学で最初の無試験による国語科（国語及漢文）の中等教員免許を得るなどの教員養成の長い歴史があり、全国有数のカリキュラムがありますが、ところが少子高齢化による教職需要の減少によって、同期のほとんどが教員になれた私の学生時代とは比較にならないほど教職が狭き門になりました。そのため、学生の多くが国語教師を目指して日本文学科に入学しながら、入学直後から教員採用試験の厳しい現実を知って、そのまま国語教師を目指すか、教職以外の人生を考えるか悩み始める学生が多くなります。さらに国語教師にならないのであれば古典などの勉強をしていて企業に就職出来るのだろうか悩むようです。実際、本学HPの就職の頁で公開されているように、日本文学科の就職先としては、教職の他は金融にも進みますが、特にサービス・卸小売が多いのが現実です。開放制による教員養成の制度のもとで、日本文学科で教員免許を取得して国語教師になる道も開けている一方で日本の文学・語学・文化に関してどんな研究でもできる自由さがありますが、それは同時に、何をしたいか分からないままになってしまうこともあります。

そこで、まず最初の時間に『はじめの一步』の第7章「キャリア

デザインと大学の学び」を用いてキャリアデザインについて考えさせ自分にふさわしい職業を見出し、社会で必要とされる社会人基礎力を身につけることの重要性を認識してもらいます。文学部はキャリアデザイン科目の開講にあたって、他学部と違って1年生の義務履修とならずに選択履修科目にとどまったため、導入科目でキャリアデザインの重要性をしっかりと認識してもらう必要があります。私は少子化が進んで以来、学生の就職先の開拓のために専門を日本語学の近世語から日本語教育へと方向転換して留学生教育・国際交流に力を入れてきましたが、さらに加えて、リーマンショックによる世界同時不況の影響で就職率が暗転して以来連続して就職部委員を務め、毎年悲惨な就職率、就職状況に接してきましたので、就職に強い学間を目指して、新たにビジネス言語学の学問体系の確立を目指しているため、概説の授業中もしばしばこれに言及する事があります。もとより日本語学は日本文学科に属してはいますが「文学」ではなくむしろ各外国語と並ぶ「言語学」という実学です。国語教師として必須の能力である古典の文法的に正確な分析・解釈の能力、グローバル化に対応した外国人学習者に対する日本語教育能力、企業の経済活動を支えるビジネス言語能力の養成という就職を意識した研究教育を重視するのは日本語学という学問そのものが有する特質です。

また、同時にこの科目は「日本語学」という高校までの授業ではほとんど接したことのない学問について、言語の系統・音声器官・音声記号・アクセント・音韻の変遷・語彙・語構成・位相語・古辞書・日本語学史・方言に至る全領域に亘ってその術語・概念等をまんべんなく身につけて日本語を科学的に研究するための基礎知識を習得させることが目的です。他の概説科目のように高校で『万葉集』や紫式部などの書名・人名などをすでに学んでいるのは異なり、IPA（国際音声字母）やアクセント記号など全く新しい知識の連続です。そこで導入教育として文章表現力の充実のために作文を課しますが、その課題を例えば「方言地図と私」のように講義で扱った日本語学の基本的な術語・概念・図表の解釈の方法を踏まえた上で自己の方言の特徴について日本語学的に記述する力を伸ばして日本語の科学的な研究能力の養成に繋げるように配慮しています。導入科目としての性格上、キャリアデザインや図書館見学などの行事もあるため「日本語学概説」でも導入科目に指定されていない別のクラスに比べて進度が遅れがちになるので、その解決は今後の課題です。

受講学生からのコメント

日本語学概説を受講して（1年生）

諸星先生の「日本語学概説」の授業は、日本語への興味をより深めることのできる授業であり、漠然としか日本語について知らない私たち1年生にとっては、とても新鮮な授業内容です。普段何気なく話している日本語を細かく分析、分類し、違いを見ていくという過程には、他の授業では得られない不思議な楽しさを感じます。

教科書の『国語要説』に即して行われる授業ですが、教科書に書かれていない知識や、参考図書も教えていただけるので、積極的に日本語学を学ぶことができます。



私自身、日本語学を専攻するつもりで本校に入学したため、大本命の授業を受けることができ、嬉しく思います。この授業を通して、日本人に必要な不可欠な言語を、今一度じっくり見つめ直そうと考えております。

日本語学概説を受講して（2年生）

日本語学概説では日本語の発音の変遷などの国語学について一年間学びます。

英語は発音について意識して学ぶ機会が中学、高校と数多く設けられてきたのに、日本語についてはこの講義を受けるまで無かったのだと驚いたのを覚えています。自分たちが最も身近に使用している日本語も掘り下げれば掘り下げるほど、興味深い研究テーマが転がっているのだということを知りました。

更に、諸星先生からは、日本語教育、ビジネス日本語についてのお話も毎回いただき、「日本語学概説」を受講することで、日本語への様々なアプローチ方法を学びました。



教員の授業努力

「伝承文学概説Ⅰ」担当

飯倉 義之

(文学部助教)

突然ですが、想像してみてください。あなたは職務上の義務で参加して単位を取らなくてはならない講習会に出席しました。すると講師はやにわに C_2H_6O について淡々と語り始め、それが無色の液体で密度 $0.789g/cm^3$ であること、融点はマイナス $114.3^{\circ}C$ 、沸点は $78.37^{\circ}C$ であること、水と任意に混合し粘度は $1.200mPa \cdot s$ (cP) at $20.0^{\circ}C$ で、社会において様々に利用されつつも、燃料・危険物として消防法等で厳格に扱われていることを喋ったとして、どのくらい興味が持てるでしょうか。予備知識のある一部の人を除いて、

多くの人は義務であるから眠りそうになりながら講義をやり過ぎて頭張ってノートを取り、形ばかりの単位認定を目指して「苦行」を積むことになるのではないのでしょうか。

改めて、日本文学の飯倉義之と申します。私の担当する講義は、主に伝承文学です。伝承文学の講義で教えることは、昔話や伝説・歌謡・語り物芸能といった口承文芸や、祭礼・年中行事・民俗芸能・人生儀礼といった民俗文化と文学との関係を通じて日本文化のありかたを理解するという「民俗学的文学研究」の考え方と方法についてです。

この「伝承文学」の考え方は、多くの学生に共有されている「文学研究」の考え方とは少しずれています。伝承文学に興味があって入学した人の他には、伝承文学概説の講義は自分との人生や専門とは関係ない「義務で無理やり単位認定を目指す講習」ととらえられるかもしれません。それはある意味で当たり前です。源氏物語や日本語の音韻や井原西鶴や方言や村上春樹について学びたいと思ってきた学生には、かつての民俗社会で伝えられてきたような「昔の田舎の生活やお話」には興味も関心もないのですから。

しかし伝承文学・民俗学は、決して「自分の人生や専門とは関係ない」領域ではありません。現代都市に生きる私たちも、正月や節分、お彼岸、お盆、バレンタインデーやクリスマスといった四季の年中行事を意識し、誕生日や七五三、成人式、結婚式、厄年、還暦、法事といった人生の折目ごとの儀式を大事にしていますし、かつての村落社会で受け継がれてきた民間説話のパターン（話型）は、現在のまんが・アニメ・ラノベ・ドラマ・映画といったエンタテインメントにも形を変えて引き継がれています。例えば国民的なまんが・アニメ作品の「ドラえもん」。優しいけれどダメ少年ののび太君は、未来の世界のネコ型ロボットドラえもんに貸してもらった22世紀の秘密道具で一旦は成功をおさめますが、慢心から使い方を誤って一転窮地に陥ります。これは昔話の「呪宝譚」の発想と同じです。現在の私たちの文化は、過去の民俗文化を受け継いでいるのだから、当然です。

私は講義ではここを工夫しています。学生が一見して自分とは関係ないと思うような知識を、一人一人の生活実感や当たり前に触れてきた年中行事や学校制度や儀礼やエンタテインメントと結びつけて説明し、理解し易く提示することを心がけています。これはもちろん、伝承文学に限ったことではないはずですが。すべての領域において学問は「いま・ここ」を理解し、その現実に立ち向かう方法としてあるということを伝える。そのことを特に、初年次教育である



概説授業の学びとして、意識しています。

最後に冒頭の、想像上のC₂H₆Oに夢中な講師に戻ってきてもらいましょう。彼/彼女の力説していた物質がアルコールの中でも酒精といわれるエタノールであり、飲用のほか殺菌・消毒。燃料としても用いられていることを伝えたとしたらどうでしょうか。例えば麦や米やイモから作られたC₂H₆Oが我々の生活に潤いを与えていることを初めとして、日々目にする週刊誌のグラビア印刷にC₂H₆Oは欠かせないこと、公共施設等に最近置かれている消毒用のあるアルコールがC₂H₆Oであることを伝えれば、もっと聴き手の興味をとらえられたのではないのでしょうか。

急いで付け加えますが、これは決して「聴き手におもねる」作法であるつもりはありません。伝承文学らしく口頭伝承の言葉を使えば、これは「方便」を用いた「唱導」のつもりでいます。つまりは、学生にわかる言葉や例えを入りに、生活実感の伴った理解を導くための働きかけです。学生に理解される「いま・ここ」と、学問の言葉を翻訳し、学問の入り口に来てもらう。そのことを考えて概説の講義を作成しています。

受講学生からのコメント

「伝承文学概説I」を受講して（1年生）

伝承文学は、文学を伝承性の視点からとらえる場合のひとつのアプローチ方法です。その概説を受講して、今まで文学をそのようにとらえて学んだことのない私にとっては、とても楽しく、斬新ささえ感じます。

記載文芸としての古典文学作品の読解は、テキストを使い、それに加えて毎回作成して配布して下さるプリントも使用します。その内容は、飯倉先生の専門分野である現代民俗論・都市民俗論と関連づけた資料も多く含まれていて大変興味深いもので、先生の話に引きこまれます。

毎回配られるコメントペーパーに書かれた学生の質問にも丁寧に答えていただき、最後には、予定された時間ぎりぎりになることもあります。

民俗学を学ぶことを目的として入学した私にとって、充実した時間であると共に広い視野で考えることのできる場となっています。

「伝承文学概説I」を受講して（2年生）

入学当時、「伝承文学」とは昔話の研究分野だと考えていました。しかし、「伝承文学概説」を受講し、例えばかつて学校の怪談として一世を風靡した都市伝説がありますが、現在では、その都市伝説がSNSなどの媒体で再び語られています。これについて、先生から「受け継いだ民俗文化や伝承を新たに位置づけなおして創造している」ことなのだと言われたとき、自分たちも伝承をしている当事者なのかと、伝承文学をととても身近なものに感じる事ができました。この授業を受けて、身の回りにある様々なものが研究対象となることを知り、文学研究の幅の広さを実感しました。

教育開発推進機構彙報

(平成26年1月1日～7月31日)

※肩書きは等は当時のもの

会議

○運営委員会

[平成25年度] 第4回：1月22日 第5回：2月26日
[平成26年度] 第1回：4月23日 第2回：6月25日

○教育開発センター委員会

[平成25年度] 第7回：1月15日 第8回：2月12日
[平成26年度] 第1回：4月9日 第2回5月7日
第3回：6月18日 第4回7月16日

○共通教育センター委員会

[平成25年度] 第8回：1月31日 第9回：2月20日
第10回：3月13日
[平成26年度] 第1回：4月23日 第2回：5月21日
第3回：6月25日 第4回：7月23日

○学修支援センター委員会

[平成25年度] 第6回：1月15日 第7回：2月21日
[平成26年度] 第1回：4月9日 第2回：5月21日
第3回：6月18日 第4回：7月16日

○ランゲージ・ラーニング・センター委員会

[平成26年度] 第1回：4月23日 第2回：5月21日
第3回：6月18日 第4回：7月16日

○合同連絡会

[平成26年度] 4月9日

○機構専任教員協議会

[平成26年度] 第1回：5月14日 第2回：6月11日
第3回：7月9日

研修会・打ち合わせ会等

[平成25年度]

2月7日：SA後期最終報告会

3月20日：後期ノートテイク報告会

[平成26年度]

4月4日：SAオリエンテーション

4月12日：SA研修会

4月16日：第1回ノートテイク研修会

5月7日：第2回ノートテイク研修会

6月21日：SA前期中間報告会

7月19日：前期ノートテイク報告会

7月31日：SA前期最終報告会

FD活動、教育支援

[平成25年度]

1月15日：人間開発学部FD研修会（教育開発推進機構共催）

[平成26年度]

4月1日：第1回初任者研修開催

7月26日：第2回初任者研修開催

7月29日：英語による授業FD研修会

出張等

[平成25年度]

1月29日：山形大学学生主体型授業見学（中山准教授、於山形キャンパス小白川キャンパス）

3月4～9日：東北再生「私大ネット36」2014年春 南三陸スタディーツアーに参加（鈴木助教、於南三陸町）

3月14日：立教大学ボランティアセンター見学（鈴木助教、朝比奈課長補佐、高橋主任、於立教大学池袋キャンパス）

3月15日：日本高等教育開発協会・ベネッセ教育総合研究所主催、「カリキュラムデザインワークショップ」参加（中山准教授、於千代田区サピアタワー）

3月24日：NHKカルチャーセンター青山教室見学（中山准教授）

[平成26年度]

4月22日：立教大学経営学部、BLPプログラム見学（中山准教授、於立教大学池袋キャンパス）

5月12日：明治学院大学ボランティアセンター見学（東海林准教授、鈴木助教、高橋主任、関口書記、於明治学院大学横浜校舎）

5月31日～6月1日：大学教育学会第36回大会参加（小濱助教、於名古屋大学東山キャンパス）

6月6日：障害学生支援交流会（高橋主任、於上智大学）

6月14日：全国私立大学FD連携フォーラム、2014年度総会・パネルディスカッション出席（中山准教授、関口書記、於立命館大学衣笠キャンパス）

6月20日：龍谷大学ボランティアセンター見学（朝比奈課長補佐、於深草キャンパス）、立命館大学サービスラーニングセンター見学（朝比奈課長補佐、於衣笠キャンパス）

6月21日：関西大学ボランティアセンター見学（朝比奈課長補佐、於千里キャンパス）

6月24日：立教大学ボランティアセンター見学（高橋主任、関口書記、瀧田学修支援アドバイザー、於立教大学池袋キャンパス）

7月5日：成蹊大学ボランティア支援センター設立記念講演会参加（高橋主任、於成蹊大学）

7月8日：立教大学経営学部、BLPプログラム授業見学（中山准教授、於立教大学池袋キャンパス）

7月11日：学習院大学外国語自習室見学（佐川准教授）

7月22日：お茶の水女子大学ランゲージ・スタディコモンズ見学（佐川准教授）

刊行物

[平成25年度]

1月31日：教育開発推進機構NEWSLETTER『教育開発ニュース』第9号

3月10日：『國學院大學教育開発推進機構紀要』第5号

[平成26年度]

4月1日：『教員カステップアップ講座—あなたの授業を豊かにする究極の一冊—』

★新任職員紹介



関口 久美子（教学事務部教務課書記）

今年の4月に教職センターから異動して参りました。教務畑で20年近く過ごしています。世の中が便利になっていくと同時に、学生さんの悩みも多様化しています。話すことで気持ちが楽になるってことがありますよね。学生の皆さんが少しでも自分らしい学生生活を過ごせるよう少しでも支援させていただければと思います。学修のことで悩んだら、まず学修支援センター相談室で、自分の気持ちを出してみましょう。

★SA(スチューデント・アシスタント)募集

教育開発推進機構では、大人数授業での教育効果の向上を目指して、SA（スチューデント・アシスタント）制度を実施しています。主な作業は教材の印刷や配布、出席カードの整理等です。学内で、空いている時間でできますので、必要なのは「やってみよう！」という前向きな姿勢だけです。SAとして活動し、大学生活をより充実させてみませんか？

【対象】 2年生～4年生

【募集期間】 前期：4月履修登録期間

※スチューデント・アシスタントは成績評価に関わる業務は行いません。

★ノートテイカー募集

教育開発推進機構では、聴覚障害のある学生のためにノートテイク（講義内容の要約筆記）をしてくれる意欲ある学生を募集しています。研修を行いますので、初心者でも大丈夫です。

【対象】 2年生以上

【勤務時間】 1コマ90分（曜時不定）

※業務内容・採用期間・給与等の詳細については募集時に学内に掲示します。

そっ たく どう じ
啾 啾 同時

— 編集後記 —

平成21年に創刊された『教育開発ニュース』も今回で10号目となりました。この6年の間に大学教育を巡る流れは大きく変化してきています。すなわち、5年ほど前までは「大学教育改革」というと、主に授業を担当する教員の「授業改善」や多様化する学生への対応が主な課題とされてきました。しかし、最近ではそうした個別の問題ではなく、カリキュラムや学生への支援体制なども含み、大学全体としてどのように、体系的、かつ有効性の高い教育体制を取れるかが課題とされるようになりました。

いわばテーマがより多岐にわたっているというわけです。本号で取り上げたLLCの開設や国際交流体制、教養総合科目の改編、そして文学部における初年次教育に対する努力といった各記事も、こうした流れのもとで、本学の「大学教育改善」も多様化していることを現しているものといえましょう。

折々の話題を提供するのが『教育開発ニュース』の役割です。本誌は今後も、より有用な情報を皆様に提供しつつ、本学の教育の展開を紹介してまいりたいと思います。(中山)